

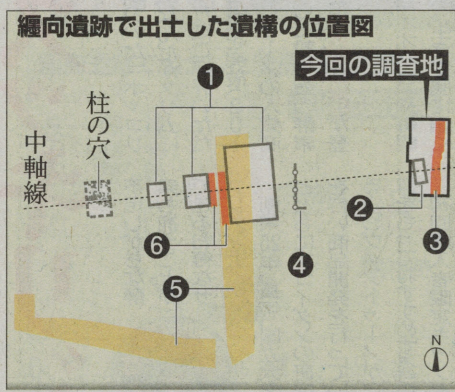
# 首長の館、繰り返し造営？

## 纏向遺跡 新たな溝の跡も確認

邪馬台国の有力候補地、奈良県桜井市の纏向遺跡では今回、3世紀前半の建物跡とともに、少し後の時代となる3世紀後半〜4世紀前半(古墳時代前期)の溝の跡も確認された。これまで

の調査で、一帯では6世紀ごろまで連続と続く遺構が確認されており、研究者は「邪馬台国から初期ヤマト王権まで、重要な建物が継続して造営され続けてきた可能性がある」とみる。▼1

大型建物跡の東側で見つかった建物跡。ポールは柱跡。右側は南北方向の溝の跡。5日午後、奈良県桜井市、水野義則撮影



- ① 大型建物跡など 3棟の建物群 ..... 3世紀前半
- ② 今回の建物跡 ..... 3世紀前半
- ③ 南北溝 ..... 3世紀後半〜4世紀前半
- ④ 建物跡 ..... 3世紀後半〜4世紀前半
- ⑤ 区画溝 ..... 4世紀後半
- ⑥ 石張り溝 ..... 5世紀末〜6世紀初め

### 面参照

溝は南北方向に幅2・5メートル、長さ20メートル以上で、3世紀前半では国内最大規模の大型建物跡の東36メートルで確認された。一帯ではこれまでの調査で、今回の溝と同時期とみられる建物跡▽4世紀後半の区画溝▽5世紀末〜6世紀初めの石張り溝——も見つかっている。



市教委は、3〜6世紀にわたって首長の居館がこの地域に繰り返し造営されてきた可能性を指摘する。

古事記や日本書紀は、初期ヤマト王権の崇神、垂仁、景行の3代の大王(天皇)が纏向周辺に宮を置いたと記している。白石太郎・大阪府立近つ飛鳥博物館長(考古学)は「このエリアが非常に重要な中枢部の一つだったとみられる。邪馬台国から初期ヤマト王権まで、纏向周辺で続いていた可能性が強まったのではないかとみる。和田萃・京都教育大名誉教授(古

代史)は「崇神天皇以降の拠点は広い範囲に複数点存在するとみられ、その一つが

今回の調査地周辺だったのではないかと話す。

(塚本和人)